7. 肝硬変の経過中に発育した原発性肝細胞癌症例の核医学的考察

○安藤啓次郎　斎藤　満
宮崎　正子　坪田　若子
児玉　隆浩　沖田　極
竹本　忠良
（山口大・内）

肝癌は，近年，各種検査法の発達により，以前に比べると早く発見されるようになったが，いまだ満足のゆく状態ではない．

今回われわれは，慢性肝炎および肝硬変症の経過中に肝癌と診断された症例について，肝シンチグラム，α-fetoprotein, angiography，腹腔鏡検査の成績を追跡し，肝癌の早期診断におけるこれらの検査法の有用性と，現時点での限界について検討したので報告した．また，現在われわれが，新しい marker として用いている β_2-microglobulin についても，あわせて述べた．

8. ^{67}Ga-citrate スキャンで集積を認めた肝腺腫と劇症肝炎の各1例

難波　経雄　野崎　肇
大森　浩之　田辺　高由
木本　克彦　重井　博
（重井・内）
木林　速雄
（同・外）
松浦　秀光　芳野　健
（岡山大・1内）

〔症例 1〕 76歳，女性．経口避妊薬の服用経験なし．心窩部痛のため入院，上腹部に球状腫瘤を触知し，AFP, CEA 正常．金コロイドによる肝シンチで左葉中央部に円形の欠損を認め，その部に一致して ^{67}Ga-citrate で集積を認めた．手術により肝左葉裏面の被膜で明瞭に境された 6.5×7×6 cm の充実性の腫瘍を摘出した．組織診断は肝細胞腺腫であった．なお胆嚢結石を合併していた．

〔症例 2〕 21歳，女性．B 型肝炎で発症し，1カ月後意識障害を発現し，血中 GOT, GPT, ビリルビン，アンモニア，AFP 値のピークを経て軽快した亜急性型の劇症肝炎である．発症後2カ月の ^{99m}Tc-Sn コロイドによる肝シンチで右葉の上外側背面よりに欠損を見，^{67}Ga-citrate でその部に強い集積を認めた．さらに，2か月後は両者共正常分布となった．発症3カ月後の腹腔鏡像で萎縮と塊状再生結節を認めたが，欠損部位は広範な肝細胞壊死部における病変と関係があると考えたい．

9. 肝疾患における血清胆汁酸 cholylglycine(CG), sulfolithocholylglycine (SLCG) の臨床的意義

三谷　健　長島　秀夫
（岡山大・1内）
湯本　泰弘
（国立松山・内）

肝疾患時の CG, SLCG 値の臨床的意義を明らかにするため，経時的測定，内因性胆汁酸負荷試験（ダイアン顆粒またはセルレイン筋注），また，経皮経肝門脈カテーテル (PTP) を用い，門脈，上腸間膜静脈，脾静脈血中胆汁酸を測定し，末梢静脈血中胆汁酸濃度と比較した．

Abott 社製 CG, SLCG RIA kit を使用した．

CG は変動幅が大きく急性肝炎，肝内・肝外閉塞性黄疸で特に高値を示した．肝機能検査との相関を見ると CG, SLCG ともに S-Bilirobin, LAP と高い相関を示した．PTP では CG 濃度は上腸間膜静脈≫門脈＞末梢血＞脾静脈の順を示す症例が多かった．SLCG は各静脈間でほとんど差がなく，cross-reactivity などさらに検討が必要と思われた．

Presented by Medical*Online